

〔説教〕

日本人と原罪

(ローマ人への手紙七・一五―八・四)

岡田稔

私は最近、キリスト教文学における日本人のキリスト教に応待する態度とどうか考え方について、二つの相反する見方のあるのに気づいた。

一つは清水汎著『天井と鉤と影』に評論されている太宰治の見方である。それによると、太宰という人は昭和十二年から二十年頃にかけては、かなり熱心に聖書を読んだらしい。「聖書一卷によって、日本の文学史は、かつてなき程の鮮明さを以ってはつきりと二分されている。」(『Human Lost』一〇六頁、昭和十二年)とその影響の大きさを見抜き、「わしは西洋の思想は、すべてキリストの精神を基底にして、或はそれを敷衍して、或はそれを卑近にし、或はそれを懷疑し、人さまさまの諸説があっても結局聖書一卷に結びついていてと思う。科学でさえも、それと無関係ではないのだ。日本人は西洋の哲学科学を研究するよりさきに、まず聖書一卷の研究をしなければならぬ筈だったのだ。わしは別にクリスチャンではないが、しかし日本が聖書の研究もせず、ただやたらに西洋文明の表面だけを勉強したところに日本の大敗北の真因があったと思う」(『バンドラの画』九三頁、昭和二十年)と書いている。

この二つの引用文からすると、太宰という人は随分適確にキリスト教を把握した人だと思われる。何よりも彼は、キリスト教にとって聖書が根本であって、聖書を研究することこそキリスト教の真意をつかむ唯一の条件だと見抜いていた。ところが彼は、果たして聖書の内容やメッセージを正しく読み取ったか。これが一番重要なポイントである。私は清水氏の引用句から二つだけを取り上げよう。

「神学としての歴史的地理的研究はまだまだ日本は外国に及ばないが、キリスト精神への理解は、素早いのである」〔世界的〕二二五頁、昭和十六年。

「教会には行きませんが聖書は読みます。世界中で日本人ほどキリスト教を正しく理解できる人種は少いのではないかと思います。キリスト教においても日本は、これから世界の中心になるのではないかと思っております」(二二四頁、昭和十七年)。

戦時中と敗戦後とでの心境には当然変化があったであろうが、本人にしてみれば、一般の日本人の中で「わしだけは特別なんだ」とうぬぼれていたのかも知れぬ。しかし、とにかくここには、聖書の言うことが日本人にはよくわかるという受けとり方が表明されているということは否定できぬと私は思った。

ところが教文館発行の『現代日本キリスト教文学全集』第八巻「自由と虚無」巻末に付せられている武田友寿の伊藤整論は、これとは全く異なった見方をよく表明している。その主旨はこうである。「伊藤は、日本文学で今までの人間の問題を真向から取り上げた作品は殆んど皆無だと言うが、この本に編纂されているものは、それをかなり深くやっている。」つまり、ここでは、聖書にもとづく原罪問題を人間の問題中の一番大切なポイントとして考えることは、日本人のまだまだ未実現しえぬ世界だ、という事実が肯定されている。その点で代表作家とも言うべき遠藤周作は、率直に、原罪意識の欠如というものを日本人の大きな特色と考えているようだ。

この点私は、戦時中関西のある出版社から発行された一書(パンフレットに近いもの)を最近再読して興味を覚えた。著者某(現存の方だから名も著書の題も伏せておく)は、こんなことを書いている。

「日本精神とは我国独特の国体精神、皇道精神、皇室中心の精神のことである。天皇はエムペラーや王と異なる独特のものである。孟子は暴君討伐論を称えたが、日本では『君君ならずとも臣臣たるべし』である。但し日本の天皇に限って絶体君君ならずというようなことはありえない。孝謙天皇は道鏡対策として清磨を宇佐八幡宮に派し、『天津日嗣は必ず皇儲を以って之に当つべし、無道者は直ちに之を除くべし』との神勅を伝えさせられた。日本の国民は皇室から生み出された皇室の子供である。義においては君臣、情においては父子である。天下を取ったヒトラーが羨しい。日本精神は言挙げせぬ、利に疎く道理に聡い。この辺りが支那等の国民性と余程異なる。正直で融通がきかず、日本人ほど義理堅い国民は他にない」とどこまでほめるのかと余りの有頂天さにハラハラさせて置いて、一転鋒先きを同胞に向けるのである。

「ところが現実はどうだ、尊かるべき教育勅語は人間の罪とその行為によって完膚なきまでに踏みこじられている。日本の命脈は唯一つ我が国民が教育勅語に真実に生きるか生きないかにかかっている。日本には極めて多くの長所がある。併しここに一つの欠点がある。それは罪悪意識の少ないことだ。罪意識において欠けている以上他にどれだけの優れた点があっても世界第一の国にはなれぬ。日本精神に対して仏教も儒教も与ええなかつた深い罪意識を与え祖國をして真に道義的国家たらしむるもの(ほんとうの意味で世界に比類のない日本精神を樹立せしむるもの)、それはキリスト教でなくてはならぬ。

本年(注・昭和十四年)二月宗教団体が衆院本会議に上程された際、民政党の斯波貞吉氏は『道德の基準は教育勅語である。これ一本で行くべきだ。宗教活動を当局が奨励するのは却って思想の混乱、風教の頹廢を来たす』と述べ

たのに対して荒木文相は『教育勅語が国民精神の根本であるのは勿論なれども国民の義務に背かない範囲で許されている宗教の活動によって、却って教育勅語を實踐するために少なからぬ効力があると信ずる』と答弁した。そこで東京市からは小学校教員に対して、キリスト教への理解をもつための指示があり、それによって多数の先生が教会の礼拝に出席した。『こういう実例によって筆者はキリスト教会が国家に奉仕する役割を定着させようと大わらわである。この小著を通読して私は二つの点で感心した。まずあの困難な時局の中で、勇敢に伝道精神を奮起し、なんとか教会が時局に対応した奉仕の道を見出したいとその理論的裏付けに懸命になっている姿であり、次に天皇には一指もふれず、しかし国民は上下の別なく勅語を實踐していかない点で罪人だときめつけ、それを實踐させうるのはキリスト教だと売り込む巧みな戦法である。そこには、やはり植村精神の末流が尚生き残っている。だが悲しいかな。罪とは何かの基準が、もはや聖書（神の律法）におかれず、勅語にすりかえられている。ということは、神が聖書の絶体神から日本精神の天皇にすりかえられているということである（戦時下本を出すすればこれ以外手がなかったとも言えるが）。

この小著の筆者と太宰治とを考え合わすとどうなるか。

「君は外国文学者のくせに、バイブルというものをまるでいい加減に読んでいらしいのに本当にひやりとした。古来毛紅人の文学者でバイブルに苦しめられなかった人は一人でもあったらうか。バイブルを主軸として、回転している数万の星ではなかったか」という太宰は、遂にこういう結論に達する。「ドストエフスキーは『もし神がいなかったら何をしてもゆるさされている』と言ったが、もし神がいなかったら僕たちが人知れずした悪事は一体誰が見ているのだ。」「神の審判の台に立たされたって少しも自分をやましいと思わぬ。人間は恋と革命との為に生れてきたのだ。神も罰し給う筈がない」（『斜陽』二二九頁）。

一方には、聖書の權威を罪の自覚に導くという点で尊重しながら、生ける絶対的人格者としての神を明確に説かないで、道徳的悪の範囲でしか罪を考えぬ人々がいる。今日福音の伝道で大きな感化を与えつつあるエバンゼリストの悔改めの説教を聞いても、この程度の罪惡観にとどまっている人々が少なくないように思う。罪は律法に対する違反であると聖書は定義しているが、律法は二枚の板に書かれており、第一の板は第二の板以上に重要であって、隣人に対する義務としての愛は神への愛に基礎づけられている。道徳的悪は宗教的悪から生じてくる。ローマ人への手紙第一章一八節以下のパウロの説くところはこの点にある。神を神として崇めぬことが一切の惡徳の泉である。原罪とはアダムたちが造り主の戒めにそむいたことにもとづく。偶像崇拜こそ最も根元的な罪である。そのことは、旧約新約を一貫する聖書の第一の主張ではないか。靖国問題でさえも、もはや偶像への拒否という根本からは浮き上っていないまいか。その点遠藤文学の主テーマが棄教であることは大変尊重すべきことではないか。キリストを捨てることはキリストの父なる神を裏切ることである。武田清子教授が背教を土着の一形態と受けとめているのも見方として面白い。仏教化ないし日本化した聖書の受け止め方は結局のところ、聖書の主なる真の神、真の救い主への裏切り以外の何ものでもない。太宰の場合、聖書を生れつきのままの自然的理性、心情で組みし易いと愛読して行くと、落着く先きは道徳的虚無の世界に至ることを示した実例の一つである。

道は二つでも終りは一つ。異邦人の心は、聖書によって更新されぬ限り、聖書を好いても聖書に従っていくことはできないのである。

JPC運動の父とも言うべきマイルエンは帰米後、出版した本の中で、「私は今のアメリカが段々日本に似てきたという感じを深くしている」と書いている。つまり米国人の棄教心理をなげく告白であろう。早く言えば、米国人の心の中で神は死んだという悲しい告白であろう。そしてそれは日本人の心の中にはまだ神が生れてもいないという告

白ではないのだろうか。

私は日本人の精神状況は別に特定のものではなく、むしろごくあたりまえの異邦人のそれだと思ふのである。

聖書を通して聖霊の恵みに浴するまでは世界中どの国民もどの個人も皆異邦人であった。正確には国民的改宗というものはありえない。どの国民、民族でも、特定者にもみ聖霊の恵みは働く。そうである限り集团的改宗の奇跡はありえても、国民的改宗ということは正確な意味ではありえないと思ふ。

そして改心とは魂が活ける真の神に立ち帰ることであつて、道徳的な悪行を悔改めて真人間になるということだけでは、真の改心ではない。神を知ることが二の次にした善行への改心ということは異教徒の中にも稀なことではない。

かつてインドの経典を英訳し終えて、宗教学者マックス・ミュラーが口にもらしたと伝えられることばは、この点大変参考になると思ふ。「インド人の宗教というものは、要するに、善をなせ、さらば汝らは救われると言う教である」と。

私は善通寺に住んでいるので毎朝早朝山陽ラジオの放送をきいている。六時から七時までの間に、ルーテル・アワーと、念法真教と、カトリックとそして最後に「私と論語」というのが聞かれる。将に日本が宗教のデパートである事実の見本である。論語を語る方は「私たちもこの教えを實行して少しでも修養を積みたい」と言われる。儒教が道徳教である以上当然である。しかし果たしてキリストはどうなのか。少くとも私は日本人の偶像崇拜に対する聖書にもとづく批判を聞くことは皆無と言つてよいのではないか。

太宰は聖書をかなり読んだと思うが果たしてどこを愛読したのだろうか。清水氏の評する限り、山上の垂訓などを中心にして読んだように思われる。パウロやヨハネが説く福音よりも、マタイ・ルカの伝える教訓の方が日本人である我々には親しみ易いことは事実であるが、聖書はパウロやヨハネによつて建てられた教会が旧約聖書と共に正典として権威を認めた本なのである。

この点赤木善光著『信仰と権威』の終りにあるアウグスチヌス研究についてのウオフィルドの所論は大変興味がい。渡辺善太老の到達した聖書観も案外落ち着くところへ落ち着いたと言えるのではないか。

聖書を読み、そして大いに感心しても、ローマ人への手紙の説くところを「アーメン」と聴従するのではなく、聖書を知ったとは言えない。原罪を云々しても、「善を行う者は一人もない」と告白しても、「その眼の前には神を恐れる畏れがない」ことを認め、膝をかがめて神の審判に平伏するまでは、罪とは何かを知つて悔い改めたとは言えない。

そこで聖書の安売りは禁物であるが、かと言つて、日本人に遂に聖書は判らぬのかと投げ出すのも気が早すぎる。「人には能わねど、神には能わぬことなし」と言う主のみ言葉を思い出すべきである。

聖書働き給うところ、石心も必ず砕かれる。この点日本人が国民全体として除外されている筈がない。必ず恵みに浴する魂がかくされていることをみ言葉の故に確信せざるをえない。福音主義者はどこまでも聖書と聖霊を信じて主の教会に奉仕する栄光と苦勞を担わねばならぬと思ふのである。この意味で私たちは一層の熱心をもつて、ローマ七、八章をよく味わわねばならぬと思ふわけである。(一九七三・七・七)

(日本基督教改革派教会神学教師、四国学院大学教授)